

「Eugene O'Neill と彼の最初の戯曲集に就いて」

(Eugene O'Neill and his Earliest Plays)

石 田 英 二

I

近代アメリカの生んだ世界最大の劇作家 Eugene G. O'Neill は、1888 年の 10 月 16 日、New York 市の Broadway に生まれた。父は James O'Neill、母は Ella Quinlan といって、ともに熱心なカトリック教徒であった。父の James は旅まわりの役者としてすぐれた俳優であり、その優れた才能は、当時有名な悲劇役者 Edwin Booth が「James は自分よりも上手にオセロを演ずることができる」と言ったことによっても十分証明される⁽¹⁾。しかし、俳優としてのこのすぐれた技能も偶々 Monte Cristo を演じて大当たりをとったために、一生涯 Monte Cristo のみを演じつづける羽目となって、その芸術性を十分に発揮することを妨げられた。James は後になって、このことを後悔し、Monte Cristo のために芸術家としての自分の一生は台無しにされたと考えていた。母親のことについては殆ど知られていないが、すぐれたピアニストであったらしい。O'Neill という名前からもわかるように、彼はアイルランドの系統である。

Eugene は 7 才の時まで父の一座に加わって旅まわりをした。次の 6 年間はいろいろな学校を転々して、1902 年 Connecticut 州 Stanford の Betts Academy に入り、1906 年卒業と共に Princeton 大学に入学したが、翌年の 6 月までしか在学していない。その理由は、学年試験の直前にばか騒ぎをして停学処分を受け、それっきりで大学に行かなかったためである。伝うるところによれば、当時の大学総長であり、後に大統領となった Wilson の邸の窓にビール壺を投げつけたということである。その後 New York の通信販売商の店員になったが、この商売は間もなく失敗に終わった。1909 年 Kathleen Jenkins と結婚して、翌年男子が生まれている。この結婚生活は、しかし、不幸にして性が合わなくて、三カ月しかつづかなかった。1909 年の末には中央アメリカの Spain 領 Honduras へ金鉱探索のために出かけたが、ものにはならなかった。1910 年 New York へ帰って父の一座に加わり、マネージャーとして三カ月間勤めたが、これには大して興味をもたず、興行が終わると Boston から Norway の船に乗り込んで Argentine の首府 Buenos Aires に行き、そこで船をおりて職から職へと転々した。先ず、Westinghouse Electric International Co. の送金係、次はある運送店の羊毛係、次に Singer Sewing Machine Company の事務員、というふうであった。しかし、どれひとつとして、身にしみて働いたことはなく、自分から辞めたり、解雇されたりして、結局は職を失ったので、やがて再び航海に出た。今度は家畜運送船の騾馬の番人になって、南 Africa の Durban へ行ったが、持ち金のないために上陸さえ許されず、再び Buenos Aires に戻って来た。そこで彼

は英国の不定期貨物船の三等水夫に雇われて、故郷の New York へと向かったのが 1911 年のことである。それより先、Buenos Aires で一時職を失って波止場ゴロのようなものになっていたこともあるが、そんな時には好んで波止場をうろつきまわり、水夫や仲仕や食いつめものと一緒に酒を飲んだ。そして働かねばならぬときは仕事を見つけて宿賃と酒代を稼いだ。この頃の体験が後の作品に現われてくる。

ところで、Buenos Aires から New York へ帰って来て、波止場の曖昧屋にしばらくごろごろしている中、今度はアメリカの定期船の水夫となって、英国の Southampton の港に行き、また別の船に乗って帰って来た。上陸後、博奕で大いに金を儲けたことがあったが、そのような場合の常として、飲めや歌えの大騒ぎの後、正気にかえった時には、New Orleans 行きの汽車に乗っていたのである。何故そうなったかは全然わからない。ところが New Orleans に着いてみると幸せなことには、父の James が相変らず評判の Monte Cristo を興行していたので、早速 New York に帰る旅費をねだったけれど、父親は承知せず、勝手に自分で稼いで帰るか、でなければその一座に入るか、どちらかにせよと言う。New York まではすこし遠すぎるので、仕方なしに一座の仲間入りをして、生まれてはじめて舞台を踏んだのである。そうして、アメリカの西海岸を興行してまわって、15 カ月ぶりに New London というところにある父の別荘に帰った。

此処で New London Telegraph という新聞の探訪記者になったのが 1912 年の 8 月であり、探訪記事のほかに週 2 回、寸鉄欄ともいうべき“Laconics”という欄に詩を寄稿していた。この仕事は自分でも面白く、また、新聞社の社主であった Frederick Latimer にも可愛がられ、半年つづいたこの生活の間に、彼としては相当得るところがあったらしい。Latimer は O'Neill の才能を認めた最初の人と言える。詩人としての O'Neill には特にすぐれたところはなかったけれど、その戯曲に詩的要素が多分に含まれているのは、やはりこの期間に詩を書き、詩人たらんとした努力、及び詩人としての傾向が現われたものといえるであろう。

1912 年の末に、彼は今までの無鉄砲な生活が祟って肺結核となり、クリスマスの前夜、Connecticut 州 Wallingford の Gaylord Farm という療養所に入れられた。この療養生活が、結局は劇作家としての O'Neill を生み出す機縁となったのである。つまり 5 カ月間のサナトリウムでの生活で、今まで得られなかった心の落ち着きを得て、これまで何の反省もなく次からつぎへと多年に亘って、いろいろなことを経験した、その印象を十分に反省し、咀嚼し、評価する機会が与えられたのである。本当に自分の一生について考えたのであった。そこで、自分の今までに体験し、また考えた、人生というものを戯曲の形式で描いてみたいという欲望を覚えはじめた。

病が軽くなると、彼はサナトリウムを出て、しばらくは New London で、家族とともに暮らしていたが、父の一座がまたもや旅まわりに出たとき、O'Neill は Long Island 海峡に面するところに住んでいた英国人の Rippin 一家に身を寄せることになった。そして、はじめて戯曲を書いたのは、まだ New London にいた 1912 年の秋のことで、その処女作は“The Web”

である。⁽³⁾ 其後1年あまりの間に12編の1幕物と、3つの長編とを書いている。この中で2編は、後に彼がハーヴァード大学の演劇科に入ってから書いたものであるが、最も初期の作品の全部をまとめる場合には、それも含めて、以上のような数字に表わすのが便利である。そして、これら初期の作品の大部分は破棄されていて、活字となったものは、前に述べた“The Web”の他、“Thirst”“Recklessness”“Warnings”“Fog”などで、これが1914年にまとめられ、“Thirst and Other One-Act Plays”と題して初めて出版された。しかし、今日では絶版となっていて、日本ではもちろんのこと、アメリカでも滅多に手に入れることの出来ない珍しい本になっている。⁽⁴⁾

さて、Rippin 家に身を寄せていた間に O'Neill は十分養生して、1914年の秋の頃には健康も殆ど回復した。そこで彼は、劇作のことを真面目に考え始め、幼な友達で、又、演劇学者でもある Clayton Hamilton に勧められて Harvard University の演劇科に入学した。この講座は America の芸術劇場発展史の上に特筆大書さるべきものである。これは Baker 教授が1905年に始めた講座であって、“47 Workshop”と呼ばれ、この演劇実験室から America の劇壇に活躍する作家、批評家、演出家、舞台装置家、俳優などが数多く出ている。しかし、O'Neill 自身は、教室の勉強そのものからは大して得るところがなかったようである。そして、Baker 教授の言葉によれば、教授も O'Neill も共に勉強をつづけることを切望していたが、学資がつづかなくて、O'Neill は間もなく Harvard を去った、ということである。

先に述べた最初の戯曲集の出版に就いて、もうすこし詳しく述べると、O'Neill はあちこちの出版社に原稿を送ったけれど、誰も出版してはくれなかった。ところが、Boston の Badger という人が自費出版なら出してやると言ったので、とうとう父親の力に頼って漸く出版したのであった。これは初版を1000部刷ったままで、再版を出すことを作者は禁じている。そしてまた、この戯曲集のうち、“Thirst”以外の四つの一幕物は、その後如何なる形式でも発表されていないために、この初版本を手に入れない限り、作品を直接読むことはできない。

Harvard をやめた O'Neill は、かねてから行きたいと思っていた Greenwich Village ⁽⁵⁾ へ出かけて、1915年から16年にかけて冬をそこで過した。この Greenwich Village は現在でもそうであるが、芸術家の多く集まる場所である。

ところで、1916年の夏、O'Neill は Massachusetts 州の Cape Cod というところにある避暑地 Provincetown ⁽⁶⁾ へ出かけた。この Provincetown は1620年に、かの Pilgrim Fathers が Mayflower 号に乗って到着した漁村である。此処には、George C. Cook とその夫人（Pen-name を Susan Glaspell という戯曲家）を中心とした若い演劇愛好家が一団を作っていて、桟橋に附属していた魚の置場を改造して舞台を設け、座席を作って芝居をしていた。彼らはこれを“The Wharf Theater”と呼んでいた。90人位しか入ることの出来ない粗末な小屋で、床の下で海の水がひたひたと音をたてているという、自然そのままの雰囲気である。従って、O'Neill の初期の作品に属する、いわゆる海洋劇（Plays of the Sea）が演ぜられるにはうってつけの場所であった。

この劇団は The Provincetown Players と言い、その中心となっていた Cook は、アメリカ新興演劇の生みの親ともいうべき天才であったが、この劇団が、その最も重大な使命、即ち、O'Neill の初期の作品を初めて上演するという使命を果たした時、ギリシヤで世を去った。

此処で演ぜられた O'Neill の最初の劇は “Bound East for Cardiff” (「カーディフを指して東へ」) である。そして、O'Neill は Provincetown Players によって見出され、Provincetown 劇団は O'Neill によって生命を吹き込まれた。両者の関係はロシアの Anton Tchekhoff とモスコウ芸術座 (The Moscow Art Theatre) との関係に似ている。序であるが、この劇団はその後 New York で Playwrights' Theatre (後の Provincetown Playhouse) という劇場によって活躍した。そして、この劇団の活動は、1915 年の夏から 1929 年 12 月 17 日に至る約 14 年に過ぎなかったけれど、近代アメリカ演劇に及ぼした影響には非常なものがある。そして、この劇団の歴史は、また一面アメリカの新興演劇史の一部でもあり、且つ又、O'Neill の作家生活の一部ともなるほど O'Neill との関係が密接である。

1916 年の秋に、この劇団は New York の Greenwich Village にきて、会員組織で活躍をつづけたが、第 1 回のだしものとしては、先に演じた O'Neill の「カーディフを指して東へ」を再演した。同年 12 月にはやはり O'Neill の “Before Breakfast” (「朝食前」) を上演し、1917 年の 1 月には “Fog” (「霧」), 2 月には “The Sniper” (「狙撃兵」), 4 月には “The Rope,” (「綱」), 11 月には “The Long Voyage Home,” (「長い帰りの航路」), つづいて “Ile,”⁽⁷⁾ (「鯨」), 1918 年の 11 月には “Where the Cross is Made,” (「十字のあるところ」), 12 月には “The Moon of the Caribbees,” (「カリブの月」), 1919 年の 10 月には “The Dreamy Kid” (「夢小僧」), など、彼の作品を次々に上演した。又、1920 年の 2 月 2 日には “Beyond the Horizon” (「地平線の彼方」) が、Broadway の Morosco Theatre で上演され、商業的に大成功を博した。これは彼の最初の長編戯曲である。もっとも、ここに至るまでには O'Neill も Provincetown Theatre で十分に自分の劇を実験する一方、Broadway の商業劇場にも進出を希望して、それとなく興行師に原稿を送っていたが、だれ一人それを買う者がなかったのである。そこで、“Smart Set” という文芸雑誌に海洋劇を三つ送ったところ、これが 1917 年と 8 年にその雑誌に掲載された。

この雑誌は相当広く読まれていたので、O'Neill の名前も今までよりは有名となり、また批評家 Nathan⁽⁸⁾ の斡旋によって、当時有名な興行師 John D. Williams の手に入るに至った。もちろん、この雑誌の編集をしていた辛辣な文芸批評家兼社会批評家である H. L. Mencken も O'Neill を認めた人の一人である。“Beyond the Horizon” のみならず、“Gold” (「黄金」), “Anna Christie” (「アンナ・クリスティ」), “The Fountain” (「泉」), などの作品も Nathan の力によって Broadway の脚光を浴びるようになった。

“Beyond the Horizon” が Broadway で上演されたのと同じ 1920 年の 11 月 3 日には Provincetown Players の手で “The Emperor Jones” (「皇帝ジョーンズ」) が上演されている。これは重要な出来事の一つで、この上演によって、これまで少数の演劇愛好家にのみ知られて

いた Provincetown 劇場が、広く New York の人々に知られた。又、O'Neill 自身の創作の歴史に於いても此の作品は、習作時代を終わって、いよいよ本格的な創作期に入った1920年度の作品中すぐれたものであるし、また、彼の全作品の中でも最も優れた作品の一つである。更に、この劇の主人公が黒人であり、そして、この劇の上演が成功したために、その後、黒人劇の上演と、黒人俳優の登場との道が開かれたのであった。この“The Emperor Jones”の成功以後、O'Neill は次々に新しい作品を発表し、その内容に、また、技巧に、新奇と深刻さを加えて行ったため、自ら求めずして興行師が彼の作品を買いにくるようになり、常に芸術的にも経済的にも成功を収めて来た。

そして、1920年と22年及び28年には、夫々「地平線の彼方」と「アンナ・クリスティ」及び「奇妙な幕間狂言」(“Strange Interlude”)によってピューリッパ賞(Pulitzer Prize)⁽⁸⁾を得ているのみならず、死後も“Long Days Journey into Night”によって同じ賞を得た。又、American Academy of Art and Science からはメダルをもらい、1926年には「ヨーロッパの舞台に於いて広く真面目に認められた最初のアメリカ劇作品として、芸術のうちで最も古いものの一つに新しく人の心を動かす形式を創造的に寄与したるもの」として、エール大学から文学博士の称号を与えられた。更に1936年には「悲劇の独創的概念の刻み込まれた、且つ誠実さ、真剣さ及び感情の強さをもった劇に対して」遂にノーベル賞を授与されるに至ったのである。

家庭生活に目を向けると、1918年には Agnes Boulton と二度目の結婚をして、Shane と Oona⁽⁹⁾ の2人の子供をもうけている。1928年に一家揃って歐洲に出かけ、それから極東に旅をしたが、その年の秋、上海で病にかかり、ヨーロッパに引返して、しばらく静養した。その後1929年には離婚して、Carlotta Monterey と三度目の結婚をし、1931年の秋、アメリカに帰り、それから間もなく、Georgia 州の沖合いの小島、Sea Island に邸宅を建てて、健康回復と執筆とに専念した。この邸宅は総体に古めかしい建て方で、O'Neill の書斎は、ある海賊船の Cabin を模したとのことである。そして、その邸宅は Casa Genotta と名付けられたが、これは Eugene の gene と Carlotta との組合わせである(casa は Spain 語で house の意)。

O'Neill は“Days Without End”(「限りなきいのち」)が1934年1月8日に Theatre Guild の手で Guild Theatre で上演されてから後、1946年に“The Iceman Cometh”(「氷人きたる」)が出版・上演されるまで、ほとんど12年の間、Broadway の商業劇場から遠ざかっていたけれども、実はその間、病と闘いながらも、前古未曾有の野心的な劇の製作を企てていたのである。その劇というのは二つの群(Cycle)から成り、第一の Cycle は“A Tale of Possessors Self-Dispossessed,” 第二の Cycle は“By Way of Obit”と、それぞれ名づけられる筈であった。そして、この仕事の進行状況を詳にすることは困難であるが、前者に於いては、アイルランドからアメリカへ移住して来た一家が、アメリカで如何なる運命を辿って行ったかを、アメリカ自体の変遷と共に描き出そうとしたもののようである。今、1946年以後、実際に完成して出版されたものや、ただその計画中に含まれたままで残ったもの、或は作者の意に充

たずして破棄されたものなど、すべてをまとめて概観してみると次の如くである。

- 1) The Iceman Cometh (1939 年完成, 1946 年出版並に上演)
- 2) Long Day's Journey Into Night (1940-41 年完成, 1956 年出版, 同年 Sweden の Stockholm で上演)
- 3) A Moon for the Misbegotten (1943 年完成, 1953 年出版, 1957 年上演)
- 4) A Touch of the Poet (1943 年完成, 1957 年出版, 1958 年上演)

その他のものは目の目を見ずに、破棄されたり、又はタイプで打った原稿の形で残っていたり、であるが、O'Neill の残したノートその他の資料から、大体次のような計画が推定される。すなわち、前記の第一 Cycle を構成すべきものは十一編の劇であって、しかも、その中の二編は double length のものである。以下にその（予定）題名を表にして示してみよう。

- I-II. The Greed of the Meek. (1776-93)
- III-IV. And Give Me Death. (1806-07)
- V. A Touch of the Poet. (1828)
- VI. More Stately Mansions. (1837-42, 又は -46 ?)
- VII. The Calms of Capricorn. (1857)
- VIII. The Earth's the Limit. (1858-60)
- IX. Nothing is Lost Save Honor (1862-70)
- X. The Man on Iron Horseback (1876-93)
- XI. (The Hair of the Dog.) (1900-32)

最後のものだけ括弧に入れたのは、実は本来 title がなく、一時は “A Touch of the Poet” が、この Cycle 全体の title であって、その場合には “The Hair of the Dog” が第五番目の劇のタイトルになる筈であったからである。現在 Yale 大学にある Collection of American Literature（その中に Eugene O'Neill Collection も含まれている）の主事、Dr. Donald D. Gallup が O'Neill の遺稿によって推測したところに従って、筆者は、これを第十一番目に置いてみた。各作品の右側に添えた数字は、その作品の中で取扱われる年代を示したものである。そして最初の二編はそれぞれ二つ宛の劇になる筈であつたらしい。しかし、この二編はいずれも作者自身の手によって破棄され、更に第六編の “More Stately Mansions” も、筆写原稿は破棄されて、僅にタイプで写したものだけが残っているという有様である。

第二の Cycle “By Way of Obit” に就いては “Hughie” という一幕物のみが未刊のまま残っている。

O'Neill が商業劇場から離れて、一応アメリカ演劇界の長老として引退したような状態に見えていた約十年間の彼の創作活動は以上の如きものであるが、1946 年になると O'Neill は最近作の哲学的な劇、その名も神秘的な “The Iceman Cometh.” をひっさげて、再び Broadway に返り咲きした。この劇は四幕物で、その上演には、夕食のための 75 分間の休憩も含めて、実に 4 時間と 15 分を要する長編である。初演は Martin Beck Theatre、その題名の Iceman

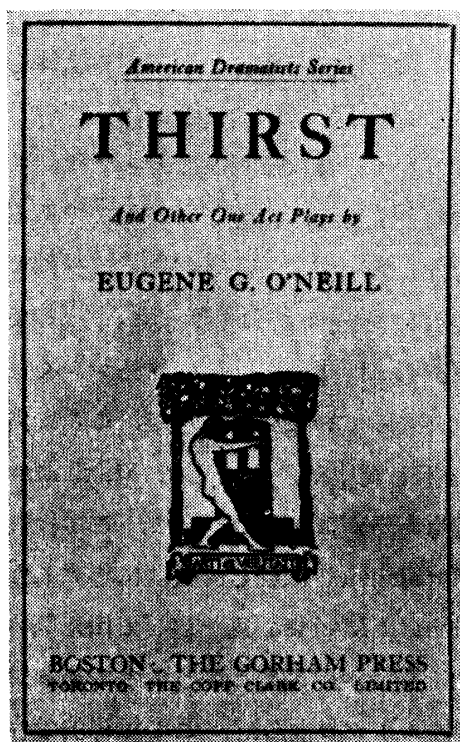
というのは、普通は「氷屋」の意味であるが、ここでは Death の意味も含まれている。すなわち、人生の敗残者にとって Illusion の喪失は死を意味する。という筋書の、その「死」を象徴している。

さて、O'Neill は 1935 年頃から前述の一群の劇を書きはじめ、先ずその outline を詳細に計画して、最初の 7 編を完成した。ついで第 8 編にかかり、別に又、3 編を完成したが、その 3 編の第一は “A Moon for the Misbegotten” (1943 脱稿) と言ひ、その年の 12 月に上演の予定、第二は “A Touch of the Poet” (1943, 脱稿) で、翌 1944 年上演の予定、第三は “Long Day's Journey into Night” (1940-41, 脱稿) で、これは作者の死後 25 年経つまで上演すべからずということであった。ところが、ここで O'Neill はまた新に全然別な、ずっと短い一群の劇を計画したらしく、その第一編を完成している。それから次第に最初の計画の誤っていたことを信ずるようになって来て、今までに書上げた劇の三編乃至四編を無造作に破棄してしまった。かと思うと、今度は、その一群の劇とはまったく無関係な別の劇のための構想を立てたりする一方、三編乃至四編の、これまた別な劇のために多量のノートを抱えた。1938 年頃には、世界情勢の動乱に心を乱され、最初に計画した一群の劇をつづけることができなくなり、1939 年の頃、その息抜きとして、“The Iceman Cometh” の創作に向かったが、翌年にはもう彼の仕事の計画全体が壊滅し始めた。もちろん、個人としての O'Neill の生活には格別の苦しみもなかったのだが、かねがねフランスを聖地として尊敬していた O'Neill にとっては、独逸軍のフランス侵入が、まるで自分の隣家に独逸軍が侵入して来たように感じられたのである。殊に召使らが戦争に行ってしまうと、オニール夫妻だけでは、大邸宅に住みきれなくなったので、家を売って、San Francisco は California 街の三部屋のアパートに引き移った。そこで彼は中風の発作を起こし、6 カ月の間病臥したが、それが次第に悪化して回復の見込がなくなり、執筆不可能の状態となった。精神的に既に創作の意欲を失っていたオニールが、ここに肉体的にも創作不能となったのである。この状態で 5 年間を過した彼が、どうして Manhattan に帰って来たのか？ 経済的に逼迫したのだらうという噂もあるが、Time 誌は、この批評は当たらないと見ている。その後 Massachusetts 州の Marblehead に転じて療養に専念したが、遂に手紙を書くことすら出来なくなり、代理人の Richard Madden 氏を通じて伝え聞いた時には、また頓に病勢悪化して、ほんの稀にしか対外的な交渉が出来ぬということであった。1950 年 4 月のことである。そして、1953 年 11 月 27 日、アメリカの生んだ、この世界的劇作家 O'Neill は遂にこの世を去った。

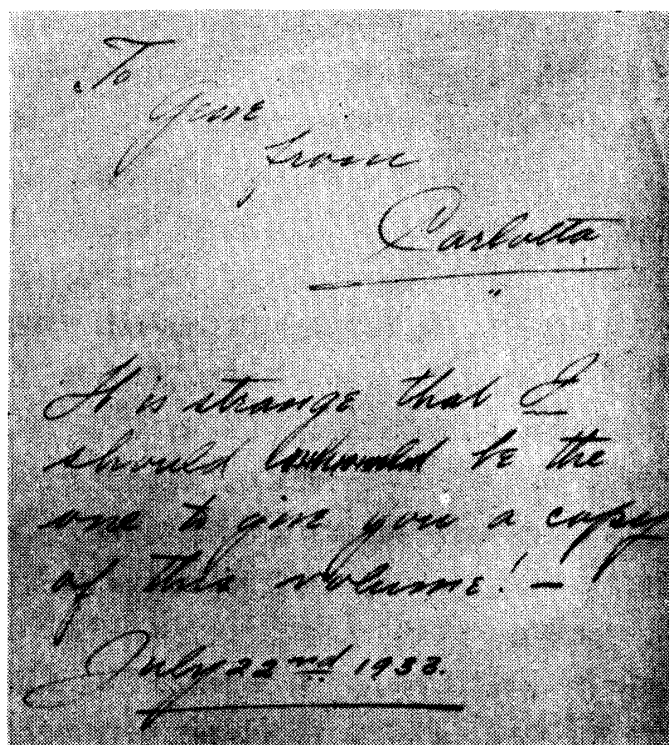
最近出版された作品の題名のみを簡単に示しておくと、1956 年の初めに Posthumous work として出版された “Long Day's Journey into Night” (「夜への長い旅路」) というものがある。これは前述の如く O'Neill が自分の死後 25 年間は公にすることを禁じたものであったが、Yale 大学図書館にある Eugene O'Neill Collection の維持費にその印税をあてる目的で、未亡人によって Yale 大学の図書館にその版權が譲られた。そして、アメリカ本国ではなく、Sweden の Stockholm の国立劇場で上演され、大成功を収めたのはその後間もなくのことで

あった。そして、アメリカ本国に於いても、この年の11月7日 New York で上演されている。

次に1957年の5月2日、同じく New York で上演されたものに“*A Moon for the Misbegotten*”があり、又、1958年の10月2日、やはり New York で上演された“*A Touch of the Poet*”がある。この、以上に述べた三つの劇はいずれも O'Neill の死後上演され、出版されたものであった。“*A Touch of the Poet*”は、先に述べた“*Long Day's Journey into Night*”の前編に当たる作品であって、「夜への長い旅路」と同じく、おそらく作者自身としては発表を好まなかったものであろう。というのは、この二つの作品はいずれも O'Neill 一家の人々がモデルとなっており、O'Neill 一家のことを描いているからである。O'Neill は1934年から46年にかけて、毎日朝8時から午後1時半まで筆を執り、先に述べたように“*A Tale of Possessors Self-Dispossessed*”という題で、一群の戯曲を書き上げる計画を立てていた。天が今すこしこの天才に齢と健康とを与えていたならば、やがて、この劇の Cycle が完成して、世界文学に今一つの偉大な作品が残されたことであろう。まことに惜しむべきことである。



原書扉写真



オニール夫人の筆蹟（同書に記入されてある）

II

O'Neill の作品ですぐれたもの、又、有名なものは、現在いずれも原書で手に入れることが出来るし、また、翻訳で読むこともできるが、前に述べたように最も初期的一幕物を五編収めてある“*Thirst and Other One-Act Plays*” (1914) は現在では非常に珍しい本となっていて、読むことはもちろん、その内容を知ることにもなかなか困難である。そのため O'Neill の作品を

論ずる場合、初期的一幕物集としては比較的入手の容易な“The Moon of the Caribbees and Six Other Plays of the Sea”（「カリブの月」他六編の海洋劇, 1919）を取上げるのが普通であるけれども、ここでは、わざとそれ以前の、厳密な意味に於ける最初的一幕物集を紹介して研究の一助たらしめんと敢えて試みることにした。O'Neill 研究家のためにも、また広くアメリカ文学研究者のためにも、この入手し難い稀覯本の内容を紹介することは無駄ではなからうと思ったからである。

この一幕物集に収められた劇の中で、正式に上演されたものは“Thirst”（「飢渴」）と“Fog”（「霧」）との二つだけであり、又、5編のうち、4編までは日本語に翻訳されている筈であるけれども、絶版その他の事情で手に入れることは殆ど不可能であろう。

“Thirst”という劇は、難破船から漂流して来た筏の上に3人の人物が乗っているところから始まる。1人は有名なダンサー且つ歌姫であり、さる公爵から贈られたすばらしいダイヤモンドの necklace をつけている。今1人は夜会服を着た紳士、そして、この2人とは反対の端に1人の黒人の水夫がうずくまっている。太陽は容赦なく上から照りつけ、筏の周囲には鱻の群が泳いでいつまでも離れない。飢と渇きと、そして、この炎天のために、2人の白人は殆ど気が狂いそうになっている。黒人だけは2人に背中を向けて単調な歌をくちずさんでいるが、その目は筏の周囲を泳いでいる鱻の群に釘づけになっている。黒人の歌っているのは、鱻に対する防禦の呪文である。今や風はすっかり凪いで、周囲は見渡す限りの水また水、そして、上からは無慈悲に照りつける太陽。2人の白人は遂に黒人が彼らに隠して若干の飲料水を貯わえているという妄想に駆られ、その水を多少でも分けてもらいたいと思うのであるが、どう考えても力づくではかないそうもないので、白人の女は先ずそのダイアの頸飾りを水と交換しようと申し出る。しかし、黒人は水を持っていないと答えるのみである。遂に白人の女は、その肉体を提供しようとまで申し出るけれど、これまた黒人が受け付けないので、とうとう女は発狂して仆れて死んでしまう。すると、黒人はその女の肉を喰らい、血を吸って生命を保とうとナイフを砥ぎはじめるのであるが、白人の男がそれに反対して、女の死体を海の中に投げ込んでしまう。怒った黒人は白人の男と格闘して遂に2人とも海の中に落ちる。前に白人の女の死体が投げ込まれた時と同様、たちまち鱻の群が集まってきて、2人の男の身体は見えなくなり、やがて、海面に黒々と血の色が浮かび出るのである。筏の上に残されたダイヤモンドのネックレスだけが、太陽の光を受けてきらきらと輝いている。

この一つの劇によってもわかるように、この一幕物集に収められている劇は、いずれもO'Neill の習作の域を出ないメロドラマばかりである。

原書の順に紹介して行くと、次の劇は“The Web”で、これは「蜘蛛の巣」と訳してもよからう。要するに、ひとたび陥ち込んだ悲惨な生活からは、どうあがいても浮かび上がるのでできない哀れさを描いたものだからである。

Rose Thomas という街の女は、Steve というごろつきの「ひも」に操られて、乳呑み子を抱えていながら、病気の身体を押して働いている。Steve は cadet （ぼんびき）であるが、

Rose を喰いものにして酒ばかり飲んでぶらぶらしている。ある夜のこと、Rose のいるアパートに Steve がやって来て、いつものように酒や金を求め、且つ、胸を病んで弱っている Rose に町に出よと強制する。乳呑み子を間にして、あまり無慈悲な Steve の態度に Rose もかっとなって怒ったり、また一方、赤ん坊のことを考えて歎願したり、いざこざが起こるが、遂に Steve が乱暴を働こうと手をふり上げたとき、拳銃を片手に飛び込んで来た男が Steve を脅かして追っ払ってしまう。この男は Tim Moran といって銀行破りのお尋ね者である。初めは Rose に対する一時の同情心から飛び込んできて危機を救ったものの、話しているうち、2 人の間にはいつとなしに、お互いのみじめな過去を顧みることから生ずる愛情が生まれてくる。しかし、警察の手が迫って来たことを覚って Tim は窓から逃げ出そうとするが、その瞬間、窓ぎわの非常梯子を昇ってきて隠れていた Steve のために射殺される。Steve は拳銃を窓から投げ込んで、そのまま逃げてしまう。殺される直前に Tim Moran は大金を Rose に渡していた。その札束を手にしたまま、茫然と死骸のそばに立ちすくんでいる Rose と、そこに落ちている Steve の拳銃と、そして Tim の死骸とを見て、警官は Rose が金欲しさに Tim を射殺したものと判断して、一も二もなく引き立てて行く。そこで幕となり、話はただそれだけであるが、主要な点は、Tim Moran と Rose との間に交わされる会話にある。2 人の生い立ち、そしてまた、一旦、不幸な境遇に沈んで悪の道に入ると、もう如何に努力してもその世界から脱けきることのできないということ、それは丁度蜘蛛の巣に虫がかかったようなものであるということを、よく表わしている。

次の“Warnings”(「警報」)という作品は、James Knapp という、エムプレス号乗組の、もはや中年を過ぎた無電技師が、病気のために次第に耳が遠くなり、いつ何時、突然に全く聞えなくなってしまうか分からないという警告を医師から受けて、自己の良心と、苦しい生活に喘いでいる家族との間に立って苦悩するが、結局、妻の歎願に屈して、いま一度の航海に乗り出す物語である。この航海さえ無事に終ったならば、もう船乗りはやめて、別の仕事を探そうと決心して乗り出した航海ではあったが、折悪しく漂流物に衝突して船は難破する。救助信号を必死となって打ちつづける彼の耳には、近くにいる船からの返事が全く聞えない。のみならず、心配して無電室におりてきた船長の怒号すら聞えない。医師のかねての警告通り突然の発作が起って彼は全くのかなつんぼ、即ち、stone-deaf になってしまったのである。船長も、やがてその事実が気がついて、船に乗り合わせていた他船の無電技師を呼んで来ると、その結果、近くに航海している船から既に何回も応答があり、それがエムプレス号に伝わっていないらしいので不思議に思っていた、ということ、及びエムプレス号のいま沈みかかっているあたりには漂流物があって危険であるから注意するようにという信号を前以て送っていたこと、などが明らかになる。激怒した船長は、その旨を紙に書いて Knapp に読ませる。船は刻一刻と沈みかけるので、皆は救命艇に移り、最後に Knapp だけが残される。その Knapp を呼びに戻ってきた例の無電技師が、無電室に入る寸前、Knapp は拳銃で自分の頭を射って自殺してしまう。船の無電技師としての失敗を死によって償おうとしたのである。これもまた極めてメ

ロドラマティックな作品であり、船に乗り込む前の Knapp の家庭の状況、その苦しい生活の有様が、登場人物の会話——この部分は、全体の割合からいってすこし長過ぎるきらいはあるが——によってよく描き出されている。

次の“Fog”即ち「霧」という作品は、難破船の救命艇すなわち life-boat の上の出来事を描いたものである。最初は舞台一面が濃い霧に包まれて何も見えず、声だけが聞える。そして、会話の進行につれて次第に霧が晴れてくる、という仕組みになっている。life-boat に乗っているのは、詩人と実業家と、死んだ子供を抱いたポーランドの百姓女であって、会話はもっぱら詩人と実業家との間でとり交わされる。その会話の内容を簡単に紹介することは困難であるが、要するに詩人と実業家との人生観の相違を現わしたもので、それが、そのポーランドの百姓女と彼女の死んだ子供とに関連してとりかわされるのである。そのうち boat は氷山の縁に吸いつけられる。救助にきた汽船の音が次第に近付いた時、霧の中で実業家は声をあげて居場所を知らせようとするが、詩人は、そんなことをすれば汽船が真直ぐにやってきて、この氷山に衝突して難破し、多くの人の生命が失われるからと言ってそれをとめる。けれども、汽船からはやがて救助のボートがやって来て、一同無事に救い上げられるのである。その時には百姓女は既に死んでいた。不思議なことに、そのボートが霧の中を、そこまでまっすぐにやって来たのは、赤ん坊の泣き声が霧の中に聞えて来たからであり、しかも、その赤ん坊は疾うの昔に死んでいる筈なのである。ここに一種の神秘的な匂いを漂わせて、この劇は幕を閉じる。全然異なった二つの人生観を持った2人の人間が現実の事態に処する態度を描いて、それを対照させているところが面白いといえよう。

最後に“Recklessness”(「向う見ず」)であるが、これは不倫の関係から生じた悲劇的結末を描いたものである。Mildred という女主人公は、金のために余儀なく Arthur Baldwin という、親子ほども年の違う金持の妻となっているが、ひそかにお抱え運転手の Fred Burgess と恋に陥ちている。ところが Burgess には Gene という前からの恋人がいて、それが Baldwin の家の女中を勤めている。舞台は最初 Mildred と Burgess との熱烈な love scene で始まるが、やがて Baldwin が車で帰って来るので、Burgess は姿を消す。Mildred が着替えのため二階へ上っている間に、Gene が嫉妬から Mildred と Burgess との仲を Baldwin に告げ、証拠の手紙を見せる。最初は容易に信じようとしなかった Baldwin も、いよいよ真実を悟るに及んで、その心の中に恐ろしい復讐の炎を燃え立たせる。彼は直に Burgess を呼んで、奥さんが急病だから医者と呼ばせに行けと命ずる。Burgess は恋人である女主人の急病と聞いて、気もそぞろに、Baldwin が乗って帰宅したばかりの自動車で飛び出して行くが、実を言うと、その自動車は調子が悪く、そのことを Baldwin 自身はよく知っているのである。こうして Burgess には危険な村の道を危い自動車で走らせる一方、Baldwin は、二階から降りて来た妻に対して、非常に巧妙な質問を浴びせかけ、遂に妻の邪な恋愛を自白させる。そうして、遂に Mildred は自らの恋愛を打明けると同時に、親子ほども年齢の違う夫に対して愛情を抱いていないことを告白し、離婚してくれと頼むに至るのである。それに対して Baldwin は極めて理

解のある寛大な態度をとり、進んで離婚を認め、運転手の Burgess と一緒にしてやろうと約束する。もちろん、その言葉の裏には此上もなく残忍な復讐の念が潜んでいるのであるが、それとは知らぬ妻の Mildred は、夫の寛大な処置に対して最大限の感謝を表わす。そのとき、表玄関の方に自動車の音がして、数人の男が Burgess の死体を運び込む。Baldwin の計画通り、運転手の Burgess は恋人の身を気遣うあまり、フル・スピードで自動車を走らせ、事故を起して生命を失ったのである。

Burgess の死骸を見て Mildred は気絶するが、Baldwin は残酷な微笑をたたえながら召使を呼んで、二人で気絶した夫人を二階の部屋に運び上げ、一人でまた階下へ降りて来る。暫くすると、召使が狂気のように飛び込んで来て、夫人が気を取り戻し、気違いのようになって部屋のあらゆる抽斗をかき探しているから、どうか二階に上ってくれと頼む。その言葉が終るか終らないうちに鈍い銃声が二階から聞える。Baldwin は一瞬はっとして駆け出そうとするが、また固い表情になって、慄えている召使に冷静な声で次のように言うのである。

“Mrs. Baldwin has just shot herself, you had better phone for the doctor, Mary.”

——幕下りる——

これもまた、他の劇と同じく習作のメロドラマに過ぎないが、その situation の取り方や夫婦間の会話、殊に Baldwin が内心には残虐な復讐を企てていながら、外面にはそれを少しも表わさず、冷静に、心理的作戦を用いて遂に妻の秘密を自白させる会話の運びなどはなかなか巧妙であって、後年の O'Neill の巧みな technique を予想させるものがある。

以上は、殆ど世に知られていない最も初期的一幕物集の梗概であって、前に述べた如くこれはなかなか読むことが出来ないために、通常 O'Neill の劇を論ずる場合には、せいぜい題名があげられるくらいにとどまっている。普通 O'Neill の劇を三つの時期に分けて、初期の romantic な海洋劇の時代を論ずる場合には、先ず “The Moon of the Caribbees and Six Other Plays of the Sea” を挙げるのが普通である。ここに紹介した一幕物は、もちろん、習作時代のものであって、芸術的には幼稚粗笨のそしりを免がれないであろうけれども、偉大な劇作家 O'Neill を本格的に研究するためには必要なものであるにも拘わらず、研究者の近づき難い文献となっているので、敢えてここに紹介の筆を執った。ただ、これはあくまでも幼稚な習作時代のもので、この習作によって O'Neill の偉大な芸術を論じ、その性質を性急に決定するという無謀を犯さないように、読者に望む次第である。

(1960年7月)

後 註

- 1) Barrett H. Clark: Eugene O'Neill, The Man and his Plays, p. 12. (Dover Publications, N. Y., 1947, Revised version)
- 2) フランスの文豪 Alexandre Dumas (1802-70) の有名な小説、「モンテ・クリスト伯爵」。我国でも明治時代に「巖窟王」という題名で、黒岩涙香による翻訳が普及した。

「Eugene O'Neill と彼の最初の戯曲集に就いて」

- 3) オニールの処女作について論ずる場合には種々の見解が成立するが、ここでは普通に処女作と認められているものとして、この作品を取上げたのである。Cf. Clark, p. 49.
- 4) 後にも述べてあるように、これは自費出版で一千部印刷され、作者は再版を許さなかった。
- 5) ニューヨーク市マンハッタン区の南西部の一地区。芸術家などの多く住むところ。
- 6) 英国教会に不満を抱いて、英国を脱出し、1620年マサチューセッツ州のプリマスに植民地を建設した英国の清教徒の一団。
- 7) 「鯨油」の意で“Oil”と云うべきところを発音の訛り通りに綴ったもの。'Ile と書くこともある。
- 8) George Jean Nathan (1882-) は、後出の H. L. Mencken と共に雑誌 Smart Set や American Mercury を編集した、米国の批評家。劇評家としても有名である。
- 9) 米国の新聞人 Joseph Pulitzer (1847-1911) の遺志によって制定されたもの。文学及びジャーナリズムの各分野に於けるすぐれたアメリカ市民の作品に毎年五百ドル乃至千ドルを与える。文学部門の中でも特に演劇賞は有名である。
- 10) 後に有名な映画俳優チャールズ・チャップリンの夫人となった。